

相模原・障害者殺傷事件の教訓

川上 輝昭

Lesson of Sagami-hara Incidence of Killing and Wounding Persons with Disabilities

Teruaki KAWAKAMI

1 はじめに

冒頭に、相模原障害者殺傷事件で、犠牲になられた方々のご冥福をお祈り申し上げますと同時にご家族、ご親戚、関係者の皆様方に謹んで哀悼の意を表します。また、けがをされた方々には心よりお見舞い申し上げます。

2016 (平成28) 年7月26日、障害者入所施設「津久井やまゆり園」(神奈川県相模原市)で入所者ら46名が殺傷されるという事件が発生した。この事件の容疑者として逮捕されたのは、当施設の元職員であった植松聖 (27) であった。障害者の生活を支援する立場にあった者が、自ら勤めていた施設内に侵入して、入所者を殺傷するという悲惨な事件であった。なぜ、このような事件が起きたのか、今後、繰り返さないためには何が必要なのか、この事件を教訓に考察を試みる事が本稿の課題である。

植松容疑者は、「障害者は不幸をつくるだけ、安楽死させた方がよい」などと発言していたことから、この事件を障害者に対する差別や偏見、人権問題として捉えた論考はすでに多く発表されている。

土本 (2017) は、当事者の立場から、多くの仲間たちが元職員に殺害された。刃物を持って、多くの仲間たちが亡くなったことに、悲しみと刃物で殺人した元職員にやるせない気持ちだ。自分にも重度と言われる弟がいる。そのことを思うととても辛い。最大の人権侵害だ。言いようがない。生きてくても生きられない仲間がいるぞ。自分たちと同じ障がい者であるけれど、殺害された人々も同じに悲しく思っていることだと思う⁽¹⁾。

神里 (2016) は、優生思想との関連において、優生思想の亡霊に不意に出くわしたことへの驚きと不安といえるのではないかと問題化している。だが問題は、それが本当に過去の亡霊なのかということだ。そもそも優生思想とは、遺伝学的に劣等な者を減らし、優秀な子孫を増やすことにより、民族全体としての健康を向上させようとする考え方である。優生思想を実践する方法としては不妊手術と中絶がある。本人の同意がない強制的な不妊手術が広く実施されたのはアメリカであり、ヒトラー政権によってさらに徹底された。日本でも1940年、ナチスの遺伝病子孫予防法をベースに国民優生法が制定された⁽²⁾。

朝日新聞社説は、「内なる差別を問い直す」という見出しで、入所者19人が殺害され、職員3人を含む27人が負傷した。その被害の重大さだけではない。園の職員だった植松聖被告の「障害者は生きていてもしかたがない」という言葉が、社会に強い衝撃を与えた。目を向けなくてはならないのは、多くの遺族、被害者、家族が差別と偏見を恐れ、いまでも名前を明らかに

するのを拒み、発言を控えていることだ。昨春に障害者差別解消法が施行された。知的障害か身体障害かを問わず、日常生活の中の差別をなくし、人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現を目指す。効率に重きをおき、共生を後回しにする。そんな心理や社会のあり方は、「障害者は回りを不幸にする」という被告の発想と底流でつながっている。そう言えるのではないか⁽³⁾。

2 事件の背景と内容

（1）歪められた障害者観

植松容疑者は、かねてより障害者に対して差別と偏見をもっていたことが報じられている。

例えば「障害者なんかいなくなればいい」「車いすに一生縛られている気の毒な利用者」「障害者は不幸をつくることしかできない」「ヒトラーの思想が降りてきた」⁽⁴⁾。かつて障害者を支える立場にあった者とは思えない言葉ばかりである。容疑者が主張したヒトラーの思想とは、ナチスドイツが第2次大戦中に、障害者は価値なき生命とみなし、20万人以上をガス室、薬物等で殺害しただけでなく、遺伝病子孫予防法により約40万人が断種させられた事件を指しているものと推測することができる。

2016（平成28）年2月14日、植松容疑者は衆議院議長公邸を訪ねて、自らの思いを綴った手紙を渡している。その内容は「私は障害者総勢470名を抹殺することができます。常軌を逸する発言であることは重々理解しております。しかし、保護者の疲れきった表情、施設で働いている職員の生気の欠けた瞳、日本国と世界の為と思い、居ても立っても居られずに本日行動に移した次第であります。・・・私の目標は重複障害者の方が家庭内での生活、及び社会的活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界です。・・・戦争で未来ある人間が殺されるのはとても悲しく、多くの憎しみを生みますが、障害者を殺すことは不幸を最大まで抑えることができます」。そして職員が少ない夜間に決行することも記されていた⁽⁵⁾。

障害者の存在そのものを否定する考え方は現代にあっては受け入れられない思考であり、憂慮すべき重大な危険要素を含んでいるといえる。

この事件の経過は次の通りである。

2012年 12月	神奈川県が設置する「津久井やまゆり園」の非常勤職員として働き始める
2013年 4月	正規職員
2015年 1月27日	入れ墨について、園が神奈川県警津久井署に相談
2月6日	入れ墨を業務中に見せないようにすることなどを園長らが求める
2016年 2月15日	衆議院議長公邸に議長あての手紙を手渡す。園の名を挙げ、入所者を襲撃することの内容
16日	警視庁から園に連絡があり、津久井署員が警戒強化のため園を訪問
18日	園関係者に「重度障害者の大量殺人はいつでも実行できる」などと発言
19日	退職が決定。署員が保護し、緊急措置入院。施設の鍵は返却させる
3月2日	退院

3 日	電話で園に退職の手続きについて問い合わせ
5 日	署が防犯カメラの設置を指導
4 月26日	園が防犯カメラ16台を増設
5 月下旬	退職共済の書類提出のため来園
6 月4 日	園内行事で職員による警備を強化
7 月26日	事件発生

朝日新聞、2016年7月27日。

（2）殺人罪などで起訴

事件前には、「障害者は不幸をつくることしかできない」「障害者を殺すことは不幸を最大まで抑えること」などの発言を繰り返し、事件後は「自分は大麻の合法化を訴えているので、大麻を資金源にしている暴力団から狙われている。殺される前になるべく早く事件を決行しなければ」とい、当初の予定を前倒しした」⁽⁶⁾などと犯行動機の説明に不自然さも見られた。このため刑事責任能力の有無が争点になった。事件後の9月から5ヶ月にわたった精神鑑定の結果、パーソナリティ障害（※と診断された。しかし横浜地方検察庁は、2017年2月24日、責任能力は問えるとして植松容疑者を殺人罪などで起訴した。

起訴内容の要旨は次のとおりである。

・建造物侵入罪

社会福祉法人かながわ共同会「津久井やまゆり園」に入所している利用者のうち、意思疎通のできない障害者を多数殺害する目的で、2016年7月26日未明、同園敷地内に侵入した。

・殺人罪と殺人未遂罪

園内で、いずれも殺意をもって、入所者（当時19）ほか42人に対し、身体を柳刃包丁等で突き刺すなどし、入所者（当時19）ほか18人をそれぞれ死亡させ、23人に対して全治9日間ないし6カ月間の傷害を負わせた。

・逮捕致傷罪

外部への通報等を防ぐなどのため、同園職員（37）の身体を拘束し、逃げ出した職員を転倒させて全治1週間の傷害を負わせた。また、職員（39）に対し顔面に暴行を加え、全治2カ月間の傷害を負わせた。

・逮捕罪

職員（23）に対し、結束バンドで両手首を禁縛したうえ廊下の手すりに縛り付け、不法に逮捕した。職員（54）に対し結束バンドで廊下の手すりに縛り付け、不法に逮捕した。

・銃刀法違反

津久井やまゆり園内において、柳刃包丁等5本を携帯した。

※パーソナリティ障害⁽⁷⁾

かつて「人格障害」ともいわれた精神障害。アメリカの精神医学会の診断基準では、妄想性、境界性、自己愛性、反社会性など、10種類のタイプがある。診断基準は①物事の見方や考え方、人との関わり方などが極端に偏っている。②柔軟性のない振る舞いが広範囲にみられる。③本人に著しい苦痛と社会・職業的な困難がある。④長期間続いている、などとされている。

3 事件の要因

（1）ナチス政権による迫害事件の影響

植松容疑者は障害者殺害の動機として「ヒトラーが降りてきた」との発言を繰り返していた。その真意を図り知ることはできないが、ヒトラー、障害者、虐殺、という言葉からホロコーストを想起していたのではないかとと思われる。20世紀最大の惨事となったホロコーストの概要を確認しておきたい。

ホロコーストとは、「焼かれたいけにえ」という意味のギリシャ語を語源とする言葉とされている。1933年1月に政権の座についたナチスは、ドイツ人を優秀な民族、ユダヤ人は劣った民族とみなし、ゲルマン民族の繁栄のためには他の民族は排斥すべきと主張し、現実に行なった。1933年当時、ヨーロッパ全域におけるユダヤ人は約900万人とされていたが、1945年の第2次世界大戦終結までに約6割が殺害された。殺害されたのはユダヤ人だけでなく、ナチス政権を非難したり批判したりするドイツ国民も国賊として処刑された。殺害の方法は主にガス室が使用されたが、銃殺刑も実施された。殺害計画の実験的な意味合いとして約20万人の精神障害者や身体障害者が虐殺された。

自国民の繁栄のためには、政権批判者をはじめ、障害者、高齢者、そして他民族は不要な存在として虐殺された。その数は400万、600万、1100万人等、諸説さまざまである。

それは、大戦末期に連合軍との戦いに敗れたドイツ軍が敗退するとき、関連施設を爆破するとともに証拠物件を焼却したために確証が得られないからである。

植松容疑者は、ナチスによって実行されたこのような障害者排除の歴史を意識していたのかも知れない。仮にその思想が動機の一部であったとするならば、負の歴史に対する認識の深刻さを読み取ることができる。

（2）優生思想に基づく差別・偏見

植松容疑者は、「障害者は不幸をつくることしかできない」「目標は重複障害者が安楽死できる世界」等と障害者に対する差別や偏見の言動を繰り返していた。その真意は定かではないが根底には優生思想も考えられる。

優生思想の考え方は、「良い資質」を持つ人が多く生まれ、「悪い資質」を持つ人は生まれなようにすることを目指した学問である。1883年にイギリスのゴルトンが提唱し、アメリカやスウェーデンにおいても制度化された。

わが国における優生保護法は1933（昭和8）年に施行され、遺伝性疾患やハンセン病、精神障害などを理由に、不妊手術や中絶を認めた。1996（平成8）年に母体保護法に改定されるまで、被害者は強制的な不妊手術による約1万6500人を含めて計8万3963人にのぼるとされている⁽⁸⁾。

優生思想に対しては、障害者の存在を否定するという意味が含まれていることからマイナスイメージにつながることが多い。

優生思想とともに障害者の安楽死や尊厳死についても植松容疑者は繰り返して言及している。例えば「意思疎通のとれない人間を安楽死させます。また、自力での移動、食事、排泄が困難になり、他者に負担がかかると見込まれる場合は尊厳死することを認めます」⁽⁹⁾。

また、心失者に対しては「心失者は人の幸せを奪い、不幸をばらまく存在です。今の言葉では重度・重複障害者がこれに当てはまると考えています」⁽¹⁰⁾。

4 今も残る障害者への差別と偏見

事件発生から1年が経過した2017（平成29）年7月24日、津久井やまゆり園で犠牲となった19名の追悼式が行われた。祭壇に遺影はなく、入所者が紙で折ったヤマユリ花が飾られていた。黒岩神奈川県知事は「夜空を彩る花火をみんなと一緒に見上げた」「小学生と二人三脚を頑張った」など、19人のエピソードを一人ずつ紹介した。そして「一人一人の遺影が飾られるべきだが、今の日本では許される状況ではない。残念に思う」と障害者への差別が残る状況を振り返り、「共に生きる社会の実現を目指さなければならない」と語った。入倉園長は「守ってあげることができなかった。私たちは何を目指していけばいいのでしょうか。立ち止まるなど、高い空から、どうか教えてください」⁽¹¹⁾と手を合わせた。

犠牲となった19名の遺影も名前も公表されないことは、遺族をはじめ関係者の意向に基づくものである。そこには障害者施設を利用していたことを部外者に知られたくない、という深刻な思いを読み取ることができる。外部の人に知られることによって本人の不名誉につながったり関係者に不名誉が及んだりする危険性を含んでいるからではないかと思われる。障害者施設に入所したり精神病院に入院したりしている場合、名前が公表されない例は珍しくない。それは共生社会のあり方に対する国民的理解が遅れていることを意味している。

保護者や親族、関係者の意向もあって名前も遺影も公表されていない。しかし亡くなった19人の男女別と年齢、エピソードは公表された。その内容は次のとおりである⁽¹²⁾。

それぞれにそれぞれの生活があり、喜びや楽しみがあったに違いない。生きる道が一瞬にして断たれた無念さは言葉や文字では表すことができない。

- ・男性（67） 畑作業が得意、室内での作業にも意欲的だった。
- ・男性（43） 音楽が好きで、レクレーションを楽しみにしていた。
- ・男性（49） 囲碁や将棋が好きで、職員とじゃんけんをして楽しんでた。
- ・男性（65） テレビが大好きでおちゃめ。出勤してきた職員を玄関まで迎えに来ていた。
- ・男性（66） ラジオが大好きで、機械をいじるのが得意だった。
- ・男性（55） 職員が気づかないことにも気づき、職員が働く様子を見守っていた。
- ・男性（66） お気に入りの香りがあった。居室のベッドで横になり、CDを聴いていた。
- ・男性（43） 野球や電車、仲間と外出することが好きで、ユニホームがお似合いだった。
- ・男性（43） ショートステイで利用。ホームの仲間を優しく見守っていた。
- ・女性（35） フルーツとコーヒーが大好き、いつも笑顔で過ごしていた。
- ・女性（55） よく旅行を楽しんでいた。仲間と散歩しり作業に励んだりしていた。
- ・女性（46） デイズニーランドが好き。ミッキーマウスの歌をよく歌っていた。
- ・女性（65） 洗濯物をせっせとたたんだ。おなかをたたいて職員に合図をした。
- ・女性（65） いつも笑顔で仲間の中心にいた。家族と日帰りで外出し、うれしそうだった。
- ・女性（19） 短期利用で来たとき、かわいらしい笑顔で一躍人気者だった。
- ・女性（60） 困難に負けない強い人、重い病気になっても回復していた。
- ・女性（26） 出かけたときにはパンを食べた。とてもパンが好きだった。
- ・女性（70） ソーラン節を歌うと喜んだ。家族と、ステージを見て音楽を楽しんでいた。
- ・女性（40） 毎日の食事をおいしそうに食べていた。散歩やドライブを楽しんでいた。

（ ）は当時の年齢

5 虐待事件の事例と聞き取り調査

（1）虐待事件の事例

46人の死傷者という悲惨な結果を生んだ今回の障害者殺傷事件は、植松容疑者が引き起こした単独犯行であった。現段階でその動機が究明されているわけではないが、各種の報道によれば障害者に対して強い差別や偏見意識を持っていたようである。それは「障害者は不幸をつくることしかできない」「障害者なんて生きていても無駄だ」等の言葉からも読み取ることができる。しかし、今回発生した事件が偶然ではなく、施設職員による障害者虐待が増加傾向にあることは憂慮すべき事態といえる。厚生労働省の発表によれば、2015年度に虐待を受けた障害者数は3154人（前年度2703人）に上り、2012年度の調査開始以来、最多とされている。施設内の職員らによる虐待被害者は569人（同525人）と増加し、過去最多となっている。2015年度に親や施設職員、事業主などからあった虐待の通報・相談件数は7458（同6868件）であった。国や自治体が虐待と判断したのは2439件（同2276件）で、被害者は3154人であった。施設職員による虐待の通報件数は2160件で前年度の1746件から24%増加していた。被害者569人のうち知的障害者か474人であった⁽¹³⁾。

この要因としては、2012（平成24）年に施行された障害者虐待防止法で定められている発見者による通報義務が浸透しているためと思われる。

2014年度（平成26）に発生した子どもに対する虐待では、児童養護施設などで42件、里親やファミリーホーム8件、障害児入所施設などで10件、一時保護施設で2件であった。

2016（平成28）年度に全国の児童相談所が対応した虐待件数は、過去最多の12万2578件、前年度比で18.7%増であった。虐待によって死亡した児童は84人であった⁽¹⁴⁾。

高齢者施設における虐待も数多く発生しているが、その事例を取り上げておきたい。

・老人ホームにおける転落事件

2014（平成26）年11～12月、神奈川県川崎市の老人ホームで、入所者3人が相次いで転落死した。当初、事故とし処理されていたが、他の職員の発言やカメラ映像などから職員による暴行の疑いが浮上している⁽¹⁵⁾。

・知的障害者施設における暴行容疑

2017年4月、栃木県宇都宮市の知的障害者施設で20歳代後半の男性が腰の骨を折るなどの重傷で全治6カ月の診断を受けていたことが明らかになった。けがの状態や現場の状況から職員による暴行容疑で捜査が進められている⁽¹⁶⁾。

・介護施設における不審死事件

2017（平成29）年7月、岐阜県高山市の介護老人保健施設「それいゆ」で、入所している高齢の男女3人が相次いで死亡した。そのうち二人の女性には外傷があったとされている。一人（93）の死因は頭蓋骨骨折で、他の一人（87）は外傷性血気胸とされている。いずれも外部から何らかの強い衝撃を受けた可能性が指摘されている⁽¹⁷⁾。

・障害者施設における暴行事件

2017年7月、三重県津市の障害者支援施設「カザハヤ園」で入所者の男性（33）が男性職員から尻などを蹴られる暴行を受けていたことが分かった。県の調査に対して男性職員は「動かになかったので蹴った」と暴行の事実を認めている。また防犯カメラの映像に記録が残されていた。園を運営する社会福祉法人正寿会の伊藤重行理事長は「体制の整備や職員教育等を進め、虐待が生じない組織となるよう全力を尽くす」とコメントしている⁽¹⁸⁾。

(2) 聞き取り調査の結果

津久井やまゆり園で障害者殺傷事件が発生した半年後、名古屋市内の障害者通所施設を利用している25人の本人と保護者から聞き取り調査を実施した。

容疑者を恨み、激しい怒りに燃えている人が多いのではと予測していたが、必ずしもそのような感情ばかりではなく、この事件に対する冷静さもうかがえた。

障害者本人から、「自分もいつ殺されるか分からない。怖くなってきた」という言葉に、事件の重大さと深刻さを感じた。また、「何もしていないのにどうして殺されるのか、不思議な気がした」という素朴な感想を聞くこともできた。保護者や施設職員の指示にしたがって毎日を過ごしているのに、どうしてなの？というごく自然で当然な疑問の気持ちを受け取ることができた。事件については関心が持てない人も見られた。それは障害の程度が重いために事件そのものが理解できないという事情からと思われる。事件について理解できない人も見られた。それは、深夜、就寝中に包丁で殺害されたという残虐な場面がイメージできない、という事情があったものと考えられる。いずれにしても今回の事件が、世の中に対しても施設職員に対しても不信感を植え付ける結果となったことは確かである。植松容疑者が残した不信感を取り返し、確かな信頼感を築いていくことがすべての関係者が背負うべき課題といえる。

保護者の方も大部分の方が冷静に受け止めているという印象であった。それは事件から数か月が経過していたという事情も影響していると思われる。

「ノーマライゼーションの意味を全く理解していない。命の尊さを否定する類のない人権侵害事件であり、いかなる言い訳も許されない」等の意見も多く、事件に対する憎しみは表現こそ異なっても共通しているようであった。「障害者は何の役にも立たないのだから、いない方がよい。許せない発言ではあるが、多くの人が抱いている気持ちかも知れない。それをストレートに表しているにすぎない。冷静に考えると本音の意味が分かるような気もする」、このような意見からは保護者の複雑な思いを受け取ることができる。なかでも「そのような容疑者を障害者支援の専門家として世に送り出した教育機関に問題がある」という意見には、類似した仕事に携わる者として反省を求められている思いであった。福祉従事者の養成に際して、専門的な知識や技術に偏重し、最も重要な人間性の育成、命の尊さの伝授が軽視されていたのではないかという自責の念である⁽¹⁹⁾。仮に高い専門性を身に付けて現場へ赴いたとしても、人間愛や命の尊厳に対する情熱が不足しては寄り添った支援はできない。当事者から学ぶという謙虚な姿勢と誠実な態度、このことを教育機関で十分に伝授しておかなければならない。

調査時期・2017（平成29）年2～3月

質問事項・あなたは今回の事件についてどんな思いがしましたか

A・本人（男性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・包丁で殺されたニュースをテレビで見た。怖いと思った。 ・障害者を支える立場の人が入所者を刺殺するなんて考えられない。どのような事情があっても許されることではない。こんなことがあるとこれから先が心配になってきた。
B 本人（男性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・僕も役に立たないから殺されるかもしれない。 ・「障害者はいない方がよい」なんてひどい考えとは思うけど、この人は意外に正直なのかも。言うか言わないかだけでそのように思っている人は他にもいるように思う。

C 本人（男性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・何のことかよく分からない。 ・人を傷つけたり殺したりする事件はよくあるけど、障害者の面倒を見ていた人が起こした事件だけに信じられない。回りの人がどうして止められなかったのか不思議な気がする。
D 本人（男性） 保護者（男性）	<ul style="list-style-type: none"> ・殺されなかった人もいるらしいから殺された人が可愛そう。 ・だいたい学校で教えるべきことを教えていないからこんな事件が起きる。施設で働く人は入所している者を殺したり傷つけたりしてはいけないことをきちんと教えないとだめ。
E 本人（男性） 保護者（男性）	<ul style="list-style-type: none"> ・（被害者が）何かしてはいけないことをしたのかも知れない。 ・コメントに値しない。容疑者は精神的に障害を持っていたのかも知れないけど、亡くなった命は帰ってこない。運が悪かったでは済まされない。再発防止のためにも極刑にしてもらいたい。
F 本人（男性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・怖い人はどこにでもいる。僕も睨みつけられたことがあった。 ・昔、「貧乏人は麦を食え」と言った偉い人がいたが、今度の事件は「障害者は死ぬ」と言っているようなもの。産みたくて産んだわけではないので辛い気持ちがする。
G 本人（男性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・悪いことをしなくても殺される。いやだなー。 ・障害を持って生まれてきた子は世の中のみなさんにいろいろとご迷惑をおかけしていることが多い。生きていることが申し訳ないという気もしている。
H 本人（男性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・（障害者を殺害することは）いけないことだと思う。 ・今回はたくさんの人が被害に遭ったけど、日ごろから多少のいやがらせならよくある話、小さいときから、いじめなどでいろいろ不愉快な思いをすることはたくさんあった。
I 本人（男性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・（何があったのか）分からない。 ・世の中、障害のない人が中心で回っている。障害の有無を超えて、なんてよく言われるけどそんなことはない。何かと気兼ねしながら毎日を送っている。これからもあまり期待はしていない。
J 本人（男性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・どうして殺されたのか分からない。いることが邪魔だったのでは。 ・今回の事件は横浜の方らしいけど、身近なところでもいつ似たようなことが起きるかも知れない。体に傷つけられることだけではなく、心に傷つけられることもしばしば経験している。
K 本人（女性） 保護者（男性）	<ul style="list-style-type: none"> ・（今回の事件は）絶対に許せない。（亡くなった人たちが）可愛そう。 ・障害者に対する差別や偏見ということがよく言われるが、「お宅は、仕事をしなくても年金（障害者）がもらえる」と言われることがある。この言葉を聞くととても複雑な気がする。
L 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・（殺傷事件を起こしたことには）理由があると思う。 ・施設に入れば安全だと思っていた。私の考えが甘かった。これから先、施設入所も考えていたので心配になってきた。安全な施設というものが本当にあるのか何だか不安になってきた。
M 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・人を殺してはいけません。 ・電車に乗っても、買い物に行っても、病院に行っても、いつも人様に気兼ねして小さくなって生きている。奇声をあげたり動き回ったりして白い目でみられることが多いから。

N 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ テレビでやっていた。お父さんが教えてくれた。 ・ 大変な事件が起きてショックを感じている。こんな凶悪な事件を起こすということは本人にもどこか障害があるのでは。普通ならありえない事件のように思う。
O 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仕方がない。死んでしまったんだから。お墓まいりしてあげたい。 ・ いじめやのけものにされることは今まで何回もあった。障害児と言う理由でいじめられるのが親として一番辛い。いじめの延長が今度の殺傷事件だったような気がする。
P 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 世の中、悪い人がいるので怖い。 ・ 障害者なんて何の役にも立たない。だからいなくなった方がよい。言っではいけないことだけど、心の中ではそのように思っている人が多いのでは、そんな気がする。
Q 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 悪いことをした人は警察に連れていかれた方がいい。 ・ ずいぶんひどい事件だけど、内心では容疑者と同じ思いを持っている人もいると思う。正直な気持ちを言葉にしていたということなので、自分に対して正直だった、という気がする。
R 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私もいつ殺されるか、心配になってきた。 ・ 親亡き後が心配、何かの事故でも起きて、苦しまないで親子があつという間に死ねるのだったら、それもありかなという気がする。正直に言ってこの先に明るい希望があるわけでもない。
S 本人（女性） 保護者（男性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何でこんなことをしたのか分からない。悪い人だと思う。 ・ 障害者や高齢者が増えると世の中は困ったことが多くなると思う。今でも年寄りが長生きするとお金がかかるので迷惑、と受け取れるよう話を聞くことが多い。口先で言っていることと本音は違うと思う。
T 本人（女性） 保護者（男性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 怖いと思った。 ・ 障害者の人権を無視しており、絶対に許せない。生きる権利の否定であり、存在そのものの否定である。人間社会にとってこれほど有害なことはない。必ずそれ相当の責任をとらせるべき。
U 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ なにがあったのかよく分からない。 ・ 障害者を否定することは人間を否定すること。障害の有無、肌の色等で人間の価値を決めると、今回のような事件につながる。人間の価値は人間として認め合うこと。これがスタートだと思う。
V 本人（女性） 保護者（男性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ おきてしまったんだから仕方がない。 ・ 世の中には表向きと本音とがある。みんな人様の前では表向きのことを言っているけど、本音は違うような気がする。今回の事件でも無関心の人も少なくないのでは、そんな気がする。
W 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 僕もいらない人として殺されるかも知れない。 ・ 障害者本人も家族も権利を主張しすぎているような気がする。障害があるということは人様のお世話になることだから、もっと謙虚にありがとう、という気持ちが必要だと思う。
X 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ （事件現場が）どんな所なのか行ってみたい。 ・ 昔から障害者は邪魔者にされてきた。今はそれが無くなったかと言えば、そうとも言い切れないのでは。普段からいろいろ感ずることはある。それは他人だけではなく身内でも同じことが言える。

Y 本人（女性） 保護者（女性）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私には分からない。 ・ 障害者を殺害することは凶悪な犯罪だけど、人間らしい扱いを受けていない障害者もいる。施設で鍵が掛けられた部屋の中で暮らしている人を見るとそんな気がする。
---------------------	--

6 求められる支援者のモラルと資質

障害者や高齢者等の社会的弱者に対する支援者からの虐待は残念ながら増加傾向にある。このような実態を踏まえて、2005（平成17）年に「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」が制定された。目的では「この法律は、高齢者に対する虐待が深刻な状況にあり、高齢者の尊厳の保持にとって高齢者に対する虐待を防止することが極めて重要であること等に鑑み・・・高齢者虐待の防止、養護者に対する支援等に関する施策を推進し、もって高齢者の権利利益の養護に資することを目的とする」（第1条）とされている。2011（平成23）年に制定された「障害者虐待の防止、障害者の養護者に対する支援等に関する法律」の目的では、「この法律は、障害者に対する虐待が障害者の尊厳を害するものであり、障害者の自立及び社会参加にとって障害者に対する虐待を防止することが極めて重要であること等に鑑み・・・障害者虐待の防止、養護者に対する支援等に関する施策を促進し、もって障害者の権利利益の擁護に資することを目的とする」（第1条）とされている。

高齢者に対しても障害者に対しても人間にとって最も重要な尊厳の尊重が明記されている。その人らしく生きることを保障する尊厳の尊重こそ支援者の最も重要な基本である。

財団法人日本知的障害者福祉協会では、支援者の意識高揚のために次のような倫理綱領を作成している。

前文 知的障害のある人たちが、人間としての尊厳が守られ、豊かな人生を自己実現できるように支援することが、私たちの責務です。そのため、私たちは支援者のひとりとして、確固たる倫理観をもって、その専門的役割を自覚し、自らの使命を果たさなければなりません。

そして、生命の尊重、個人の尊厳、人権擁護、社会への参加、専門的な支援について明記されている。専門的な支援では、「私たちは、自らの専門的役割に使命を自覚し、絶えず研鑽を重ね、知的障害のある人たちの一人ひとりが豊かな生活を実感し、充実した人生が送れるよう支援し続けます」とされている。

各種の法律や倫理綱領の示されている内容を待つまでもなく、高齢者や障害者の人権を守り尊厳を尊重することはごく当然のことである。その当然のことが現実には守られていないというところに問題の深刻さがうかがえる。課題解決のためには支援者としてのモラルと資質を向上させることが何より求められる。

モラル向上では、高齢者や障害者がおかれている立場を理解し、同じ人間として尊敬の念をもつことである。施設等において、支援に携わっていると上から目線になりやすい。このことが尊厳軽視につながりやすい。支援者も要支援者も同じ人間として対等な立場にあることを常に意識しておかなければならない。

資質の向上では、支援の内容を常に振り返ることが重要である。その場における言葉がけ、具体的な支援内容の一つ一つが最もふさわしいものであったか、最善の利益が提供できたか、自己評価・点検を行うことが不可欠である。

もちろん、施設内にあっては上司はもとより、先輩職員、同僚職員も多く勤務している。「報告・連絡・相談」を励行し、情報を共有する努力が求められる。

多くの事例が多忙や負担の増大が原因とて挙げられている。上司に指導を仰いだり同僚に協力を求めたりするなど、一人で仕事を抱え込まないという意識改革も重要である。

7 おわりに

事件発生から1年が経過した2017(平成29)年7月、二つの障害者団体が声明を発表している。

- ・7月26日、あの日から1年が経ちます。19人のかげがえのないいのちを奪い、さらに多くの人たちの心身を傷つけ続けている相模原の津久井やまゆり園での殺傷事件は、私たちにさまざまな問題・課題を突き付けました。この事件を引き起こした背景にある優生思想、障害の重い人たちの暮らしの場のあり方、事件の匿名報道、いずれも容易に答えが出ることはありません。だからこそ、この事件を風化させることなく、問い続けなくてはならないのです。

(日本障害者協議会)

- ・2016年7月26日、神奈川県相模原の津久井やまゆり園で19人のいのちが奪われ、27人が重軽傷を負った悲惨な事件から、まもなく1年がたちます。やまゆり園で暮らしていた人びと、家族の皆さんが、安心できる日常をとり戻せるよう、国と自治体の責任において、本人のねがいや家族の希望、職員や関係者の思いにもとづいた暮らしの場の再出発が求められています。そして、これから始まる裁判のなかでも事件の真相と背景が明らかにされることを通して、障害のある人びとのいのちと尊厳が守られる社会のあり方が、真摯に問われることを望みます。(全国障害者問題研究会)

いずれも事件の真相解明と二度と同様な事件が発生しないように、との強い決意が込められている。事件が発生し47名もの死傷者を生み出した事実を踏まえて、今後、二度と繰り返さないことが最も重要なことである。

事件を引き起こした植松容疑者は「障害者は生きていても仕方がない」等の言動からパーソナリティ障害と診断された。しかし責任能力はあるとの判断から裁判が進められることになっている。犯行の動機や背景が明らかにされることを期待したい。そのことが再発防止に不可欠と考えるからである。

今までに伝えられている内容を見る限り、障害者を価値のない人間として存在そのものを否定している。このことは誰からも理解や同情を得ることはできないと思われる。しかし、実はノルウェイでも同様の事件が発生していた経緯がある。この事件は2011年7月22日、アンネシュ・ブレイビク受刑者が自動車爆弾によって8人を殺害し、さらに銃を乱射して69人を殺害した。犠牲となった多くの人たちは移民の受け入れに寛容な労働党大会参加者であった。受刑者はネオナチ運動に参加していたことから反イスラム的な思想の持ち主となり、犯行の動機を「欧州をイスラム支配から救うため」と述べている⁽²⁰⁾。

事件の背景が障害者観とイデオロギーの問題であり、次元が異なっていると受け取ることもできる。しかし、自らの価値観にそぐわない人の存在価値は認めない、という考え方では共通している。

能率性、効率性、合理性等の価値が優先されている以上、今回のような事件は繰り返されるかも知れない。これらの価値観に障害者はなじまないからである。能率性、効率性、合理性に加えて人間性が尊重されることで障害の有無を超えた共生社会が可能になるのではないかと考える。

わが国の障害者施策の根幹である障害者基本法にはこの法律の目的が次のように明記されている。「この法律は、全ての国民が、障害の有無にかかわらず、等しく基本的人権を享有する

かけがえのない個人とし尊重されるものであるとの理念にのっとり、全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会を実現するため・・・障害者の自立及び社会参加の支援等のための施策を総合的かつ計画的に推進することを目的とする」（第1条）とされている。

障害者に対する差別や偏見をなくしていくためには、学校教育はもとより、日常の社会生活においても理解し合える場を保障していくことが重要である。この基本的な課題を解決していくことが共生社会実現の鍵といえる。

- (1) 『福祉労働』 NO153、8頁 現代書館。
- (2) 朝日新聞、2016年8月19日。
- (3) 朝日新聞、2017年7月27日。
- (4) 『福祉労働』 NO153,13頁。
- (5) ヤフーニュース、2016年7月26日。
- (6) 朝日新聞、2017年2月25日。
- (7) 朝日新聞、2017年2月24日。
- (8) 朝日新聞、2017年3月14日。
- (9) 『創』 2017年10月号、創出版。
- (10) 同上
- (11) 朝日新聞、2017年7月27日。
- (12) 同上
- (13) 毎日新聞、2016年12月16日。
- (14) 朝日新聞、2017年8月18日。
- (15) 朝日新聞、2016年2月17日。
- (16) 読売新聞、2017年9月10日。
- (17) 朝日新聞、2017年8月19日。
- (18) 朝日新聞、2017年9月5日。
- (19) 川上輝昭、「日本保育学会会報」2017年9月号。
- (20) 朝日新聞、2016年12月25日。